The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 疑似引用マーカーあるいは発話連結辞としてのgenre |
| Author(s) | 春木, 仁孝 |
| Citation | 言語文化共同研究プロジェクト. 2020, 2019, p. 21-30 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/77023 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 疑似引用マーカーあるいは発話連結辞としての genre

春木　仁孝

## 1. はじめに

現代フランス語においては、côté, niveau, façon, genre などある種の名詞が前置詞などの機能語として用いられるという現象が観察される。筆者は春木(2016)において、これらのいわゆる文法化現象について考察を行なった。そこでは今後の研究に資するべく、この現象に関わる主要な名詞（句）を取り上げ、現象の全体像の提示と分析、そして考察すべき関連する問題などにもできるだけ触れることを心がけた。一方で個々の語彙が持つ個別の問題については更に考察を深めるべき点が残った。たとえば春木(2019)は春木(2016)で取り上げた表現の一つである histoire de についてさらに考察を行なったものである。

本稿では、春木(2016)で取り上げた語彙の一つである genre について更に考察を行なう。名詞の機能語化という現象の中でも genre は特に興味深い変化を示し、単なるカテゴリー化だけでなくヘッジ表現的に用いられたりもする。更に興味深いのは、genre が文を導入することができる点であり、それは直前の表現の詳しい説明であったり、直接話法もしくは間接話法的な文であったりする。本稿では genre が導入する文の性格と、この現象と genre の他の用法との関係、換言すればどうして文を導入するという機能が発達してきたのかといった点を中心に考察を進めていく。その際、genre が du genre や le genre など、同じ機能に対して形式的なヴァリエーションを持つ点などとも関連づけて考察を行なう。他の機能語化した語彙にも形式上のヴァリエーションは存在するが、genre と他の語彙の場合とではこのヴァリエーションの持つ意味が少し違うという予想がある。また同じく文を導入する機能を持つ style についても可能な範囲で言及する。

先ず機能語としての genre の主な用法を簡単に説明しておく。詳しくは春木(2016)を見てもらいたいが、最も多いのが無冠詞名詞を導入するタイプである。

(1) Betty avait adopté une position plus classique, *genre lotus*, le dos bien droit et le regard tourné vers l'intérieur.　　(Philippe Djian, *37° 2 le matin*. 1985 : 214)

（ベティーはより古典的なポーズをしていた。いわゆる蓮花のポーズみたいなので、背中をしっかりのばし、視線は自分のうちに向いていた。）

次に数量表現を導入する例がある。

(2) Il a annoncé sa retraite *genre* dix fois ces quinze dernières années.[1)]

（彼はこの 15 年の間にまあ 10 回は引退すると言った）

この種の表現では数量をぼかすのではなく、数量の程度の高さに対する発話者の驚きやあきれ、時には非難の様な主観的な評価が表わされている。一方、以下の例では動詞句の前に置かれて動詞句の内容を和らげるというヘッジ表現的効果を認めることができる。

(3) Je me demandais si tu pourrais *genre* me donner un coup de main.

---

1 出典が無い例はネットからの収集例である。煩雑になるので URL は省略する。引用例についても出版社は省略する。

（ひょっとしてちょっと手伝ってもらえないかな）　(Yaguello 1998)

次に、genre がその前の発話が述べたことに対して、より詳しい説明や正当化のための例示となる文を導入する場合がある。

(4) Monsieur Hardouin, y a qu'un truc qui va pas chez lui, c'est sa politique, *genre* il sait comment il faudrait faire pour que ça soit plus galère pour la malaise des jeunes !　(Thierry Jonquet, *La vie de ma mère !* 1994：56)

（アルドゥアンさんには一つだけ困った点があるんだ。それは彼の政治の話で、自分は若者の不安に対して状況をよくするにはどうすればいいか知っているんだというような話をする）

(5) Quand je lui ai dit que t'étais pas sûr de venir elle était vraiment pas contente, *genre*：« si vous jouez pas je chante pas. »　(Fleischman and Yaguello 2004)

（彼女に君が来れるかどうか分からないって言うと、彼女は本当に不満な様子で、「あなたが（ピアノを）弾かないのなら私は歌わないわ」っていう感じだった）

本稿で考察の対象にするのは genre が例(4)(5)のように文を導入する場合である。

## 2. 文を導入する genre とその形式

先ずは誰かが発している発話を引用しているかのような場合から見ていくことにする。

(6)－ Mais que veux-tu que je fasse ? Fermer ma boîte de communication, *genre*：« Maintenant je suis guérisseuse, venez à moi, petits malades ; j'ai une terre de sorciers dans laquelle je puise l'essence de ma magie. »

(Frédérique Deghelt, *Les brume de l'apparence*. 2014：98)

（一体どうしろというの。「私は今や治療師になりました。病気の人たちは私のところへいらっしゃい。私は魔法使いたちがいる土地を持っていて、そこから私の不思議な力を得ているのです。」とでも言って、私がやってる広告代理店を閉じろと言うの。）

(6)は(5)と同様に引用符を伴なって直接話法的な発話が導入されている。ただし注意すべきはいずれも実際の発話の再現というよりは Fleischman and Yaguello (2004)も指摘しているように、一つのタイプとしての発話である。(5)であれば「まあ言ってみればこんな感じだった」といったニュアンス、(6)であれば「まさかそんなことが言えるわけないでしょう」といった気持ちが表現されている。(4)もアルドゥアンさんの政治的な側面を彼が発しそうな言葉を間接話法的な発話の形で導入することで説明しており、「ほらよくそういうことを言う人がいるけれど」といったニュアンスも感じられる。いずれも話し手はその発話に対して責任を取らず、いわば話し手はその内容を突き放して述べているのである。

次の例は形式的には興味深い例である。Chloé は自分の言葉の最初に genre をつけることで、「とでも言うのかい」というニュアンスで Lily の言った言葉を皮肉っぽく非難している。genre なしでも会話は成立するがその場合は単なる直接的な反論になるが、genre があることで相手の言動に対して「結局こう言いたいんでしょう」という皮肉が強く感じられる。

(7)（娘達が母親から口論をやめるようにたしなめられて）

— Je veux bien arrêter de me disputer, rétroque Lily, mais faut qu'elle arrête d'être bête.

Chloé se lève et se penche sur sa sœur.

— *Genre* c'est moi qui suis bête ? La bonne blague ! (...).

(Virginie Grimaldi, *Il est grand temps de rallumer les étoiles*. 2018 : 219)

(「言い争いをやめたいのはやまやまだけど、それにはクロエが馬鹿なことをいうのをまずやめないと」とリリーは答えた。するとクロエは立ち上がって妹を見下ろしてこう言った、「馬鹿なのは私だとでも言うの。よく言うわ」)

これは Lily の態度や言葉がまるで、C'est toi qui es bête.と言ってるかのように思えるということであり、話し手 Chloé は皮肉るだけでなくその内容を拒否しているのである。

実は、以上のように実際に発せられたかのような文を導入する例は、筆者の収集例の中ではむしろ du genre＋文という形を取る場合の方が圧倒的に多い。例を挙げる。

(8) Betty secouait sa tête comme un métronome pendant que je bredouillais les pires âneries *du genre* ça va pas, ma belle, tu te sens pas bien... ?

(Philippe Djian, *37° 2 le matin*. 1985 : 93)

(ベティーは僕が「調子がよくないのかい、気分が良くないのかい」みたいな最悪の言葉を口走っている間中、メトロノームのように頭を振っていた。)

(9) Yvonne pimente notre discussion en glissant quelques tirades à la Jean-Pierre Coffe *du genre* : « C'est dégueulasse » ou encore « Ils vont nous faire crever avec ces saloperies ! ». (Sophie Tal Men, *Entre mes doigts coule le sable*. 2017 : 21)

(イヴォンヌは時々、「それってひどい」とか「彼らはその下劣な行為で私たちを駄目にするんだ」といったジャン＝ピエール・コフ流の決まり文句をはさみこむことで我々の議論をピリッとさせた。)

しかし、これらの例では(4)(5)(6)で見られるような皮肉や拒否、あるいは話し手がその発話から距離を取っているという点は見られず発話は単にカテゴリー化の働きをしているだけである。最後に形式として多くはないが le genre＋文という形式も存在している。

(10) Karim redescend. Il nous rejoint et joue au mec silencieux. *Le genre*, ne me demandez pas, je raconterai rien. (*Chroniques de l'asphalte 1/5*. 2005 : 70)

(カリムは降りてきた。僕たちと合流したが寡黙な男を気取っている感じだった。何も聞いてくれるな、どうだったかについては何も言わないからな、みたいな。)

(11) (Dédé は学校の行事でロメオの役をする) Nous, on s'était tranquillement installés au premier rang. Avec des pop-corns et tout. *Le genre*, on est prêts à bien se foutre de ta gueule Dédé. (Samuel Benchetrit, *Chroniques de l'asphalte 1/5*. 2005 : 68)

(僕たちは第1列目におとなしく座っていた。ポップコーンなんかを持って。まあ、デデ、いつでもおまえのことを笑ってやる準備ができているぞってわけだった。)

(11) は自分たちの様子の説明と考えることもできるが、ta gueule などの表現を見ると心の中で思っていることを表現した心内的な発話を導入していると考えることもできる。

## 3. 説明文を導入する genre とその形式

次に発話ではなく、文の形を取った説明を導入する例を見てみよう。

(12)（家出しているが様子を見るため小学校の先生に電話をした）

— Mon petit, mon petit, elle a fait, *genre* elle allait se mettre à chialer, dis-moi tout de suite où tu es, je viendrai te chercher, ta mère se fait un sang d'encre depuis hier, aie confiance en moi.. (T. Jonquet, *La vie de ma mère !* 1994 : 137)

（先生は今にも泣き出しそうな声でこう言った「ねえねえ、いい子だから、今どこに居るのか言ってちょうだい。迎えに行ってあげるから。お母さんは昨日からそれは心配しているんだから。先生を信じてちょうだい。」）

(13) （どうして過去にリストカットをしたのかと問われて）(...) j'avais un copain adorable, des parents en or, de bonnes notes, mais je sais pas, je me sentais vide. *Genre* plus rien n'avait d'intérêt. C'était comme si j'étais enfermée à l'écart des autres, seule. (V. Grimaldi, *Il est grand temps de rallumer les étoiles*. 2018 : 305)

（私には素敵なボーイフレンドがいたし、文句のない両親もいた。成績も良かった。でもどうしてか分からないけど私は自分が空っぽに感じられたの。もうすべてに意味がないっていう感じ。私はまるで他の人から引き離されてひとりぼっちで閉じ込められているみたいだった。）

(14) Le chinois, c'est vraiment une belle langue, *genre* à l'épicerie, hier, quand elle parlait, c'était comme si elle chantait. (Fleischman& Yaguello 2004 )

（中国語は本当にきれいな言葉だ。たとえば昨日食料品店で（店員の）彼女が（中国語を）話していると、まるで歌っているみたいだった。）

(15) Ce jean, il me va mieux, *genre* il me serre déjà moins.

(Fleischman& Yaguello 2004)

（このジーンズの方が私には合っている。なぜって先ずきつくないし。）

これらの例では、genre によって導入される部分は統語的に先行部分からは独立しており、comme si ((12)(13)) や par exemple ((14))、あるいは disons や c'est que ((15)) などで genre を置き換えることができる。このように説明を文の形で導入する場合については収集例の中には du genre＋説明文という形式は見つからなかった。また le genre は全体的に用例数が非常に少ないが、先に挙げた(11) は説明文を導入しているとも考えられる。

## 4. 分析

ここまでに見てきた発話を導入する場合と説明や正当化を導入する場合それぞれと、genre, du genre, le genre という三つの形式との関係にはかなりの偏りが見られる。直前に述べたことのより詳しい説明やあるいは正当化を文の形で導入する場合は基本的に genre 単独という形式を取る。(13)(14)(15)などがその典型的な例である。そこでは genre が導入する文は句読点のあるなしにかかわらず直前の文とは統語的に独立している。genre は説明文や正当化の文全体に副詞的にかかる談話小辞 particule dicurssive と考えることができる。一方、誰かの実際の発話であるかのような文を導入する場合は genre のこともあるが、そ

の場合は一般的には du genre という形を取ることが多い。

ところで、現代フランス語における機能語としての genre の最も基本的な用法は名詞句を別の名詞句で説明する以下の様なタイプである。

(16) Je déteste le rose *genre Hello Kitty*, (...). (私はハローキティー風のピンク色が嫌いだ(...))

(Lorraine Fouchet, *Entre ciel et Lou* 2017 : 22 )

le rose という色を「ハローキティ風の」と説明しているのである。この際、genre の後にはある程度知られている固有名詞が現われることが多い。つまり共有知識に訴えて理解させるのである。普通名詞が用いられるときも一般的にイメージを喚起しやすい事物を表わす名詞句が無冠詞で用いられる。たとえば、lunettes de soleil *genre haute montagne*「高山用のサングラス」は、高山での紫外線の予防のためのサングラスという一定のイメージを喚起させる。この場合、lunettes de soleil *pour* la haute montagne のように言い換えることができるが、genre は pour と同様に前置詞的な機能を果たしている。このような場合の genre はたとえば un film du genre d'horreur のような表現における du genre の前の du が省略され、後続の名詞を導入する前置詞 de（と場合によっては定冠詞）も省略されて最終的に<名詞句＋genre＋名詞句＞となったものである。genre のこの用法は前置された名詞句の内容をカテゴリー化するのがその機能なので、genre に形容詞が後置される例は原則としてない[2]。du genre＋形容詞という例は être du genre +形容詞という構文では現われるが、その場合はむしろ属性付与の機能を持ち、形容詞だけの場合と比較して du genre はヘッジ的な機能を果たしている。

(17) ― Vous aimez mon fils ?

― Vous êtes *du genre direct*. (L. Fouchet, *Entre ciel et Lou*, 2016 : 109)

(「私の息子が好きなのですか」「あなたはまあ率直な方ですね」)

それ以外にも du genre は à+不定詞や、genre を先行詞とした関係節を従える例も多い。その場合は être du genre の後であっても、属性付与と言うよりも説明的な内容によって新たなカテゴリーを作って、対象をそのカテゴリーに分類するというカテゴリー化の側面が強くなる。

(18) Par exemple si c'est sa semaine de cuisiner et si je rapporte, disons une sole, parce que j'en ai eu envie, elle n'est pas *du genre à gémir que je lui perturbe tous ses plans*. Elle s'adapte.

(Anna Gavalda, *Je voudrais que quelqu'un m'attende quelque part*. 1999 : 123)

((...) 彼女は私が予定をすっかり混乱させるなんて文句を言うタイプじゃない。彼女は状況に対応できる人だ。)

この種の例は人についての場合が多く、起源的には(18)のような il est du genre à...のような構文の主語と動詞が省略されたものだろうが、興味深いのは形式的に du genre の部分が先行の文から独立して用いられている例が見られる点である。

---

2 ただし de+名詞と同じ機能を果たす一部の関係形容詞が来る例は存在する。たとえば un bureau genre scolaire のような場合である。

(19) Patrick est un vrai gentil qui a l'air d'un vrai méchant. *Du genre à rouler en Harley-Davidson et à s'arrêter aux passages piétons.*

(Valérie Perrrin, *Les oubliés du dimanche*. 2015：214)

（パトリックは外見は本当に意地悪そうだが本当に優しい人だ。ハーレイを転がしているけど、横断歩道では停車するというようなタイプの人だ。）

以上のような不定詞節や関係節による説明、つまりカテゴリー化の部分がさらに統語的に独立すると、典型的な型にはまった発話や会話を導入してカテゴリー化をする(8)(9)や(20)のような例につながっていく。なお、付け加えるならば典型的な型にはまった発話や会話が用いられるというのは、genre が名詞を導入する場合にイメージが湧きやすい固有名詞が用いられることが多いことと同様の理由からである。

(20) (...) elle avait hurlé *des trucs du genre tu feras ce que je te dirai de faire, je suis ta mère, c'est moi qui décide.*

(Grégoire Delacourt, *On ne voyait que le bonheur*. 2014：272)

（...彼女は「あなたは私がしなさいと言うことをすればいいの、私があなたの母親なんだから、決めるのは私よ」みたいなことを叫んだ。）

(8)(9)や(20)のように前置された名詞句につながる例もあるが、その場合も truc, quelque chose, tirade「決まり文句」, réflexion, pancarte「張り紙、プラカード」などのように言動や書かれた言葉、思考を表わす名詞が一般的で、構文によっては(20)の des trucs や(8)の les pires âneries のように省略したりあるいは多少構文を変えることで名詞は必要がなくなる。あるいは、名詞があっても du genre の前後にカンマがある場合もある。

(21) J'allais dire quelque chose, *du genre*, vous vous foutez de ma gueule, quand on a sonné à la porte. (Grégoire Delacourt, *On ne voyait que le bonheur*. 2014, :130)

（「私を馬鹿にするのか」的なことを言おうとしたらドアのチャイムがなった。）

前置詞 de によって genre が quelque chose に接続しているような構文でありながら、前後にカンマがあるということは書き手の意識の中では du genre は独立した要素として捉えられていると考えられるので、既に副詞もしくは引用マーカー的と分析できる。(22)のようになると、明瞭に du genre は独立した副詞または引用マーカーと分析することができる。

(22)（看護師のやり方を批判して）(...) elle traite le père Eugène comme un bébé. *Du genre « Alors, comment on va ce matin? On a fait son pipi?»*, et le père Eugène, il aime pas ça!

（彼女はウジェーヌさんを赤ちゃん扱いして「さあさ、今朝の具合はどうでちゅか、おしっこはしましたか」みたいなことを言う、ウジェーヌさんはそういうのは嫌いなのだ。）

まとめると名詞を導入する場合は圧倒的に genre＋（無冠詞）名詞句という形が多く、du genre＋（無冠詞）名詞句という形の例は希であり、その少数の例においては常に du genre の前に名詞句がある。一方 genre ＋名詞句の場合は必ずしもその前に名詞句があるわけではなく、先行文の内容全体あるいは一部に副詞的にかかっている場合も多い。一方、先行

文の内容を説明あるいは正当化する文は一般に genre によって導入されるのに対して、いかにもという会話文の形を導入してある種のカテゴリー化をする場合は原則として du genre が用いられる。その場合も前に名詞句があることが比較的多いが、名詞句が実質的な意味が薄かったり、その名詞句から統語的にカンマやピリオドで切り離されている場合もある。最終的には(22)のように前につながる名詞句なしで du genre が用いられる。このいかにもという内容の文を導入してカテゴリー化するタイプの du genre の起源を考えるとき、中間的なタイプとしてスローガン的なフレーズを導入する以下のような用例が介在しているのではないかと考えられる。

(23) (...) d'énormes tatouages qui faisaient peur *du genre la France aux Français, les immigrés dehors,*(...)!

（「フランスをフランス人に！移民は出て行け！」的な人を怖がらせるでっかいタトゥー）

(24) De plus aucun panneau *du genre "stationnement interdit, sortie de véhicules"* n'y est apposé.

（おまけに「車の出入り口につき駐車禁止」のような掲示板はそこには貼られていなかった。）

そして既に触れた du genre à＋不定詞や du genre qui/que のような構文を考えれば、du genre＋文という構文への拡張は無理なくなされたと考えられる。

le genre については、説明文や典型的な会話文を導入する例は見つかるものの、用例が少なく genre や du genre との違いはあまりよく分からない。たとえば(10)はこんな場合に言われそうな会話文を導入しているが、ここは du genre でもよいのではないかと思われる。(11)は説明の文とも考えられるが、ここも他の用例から見て genre あるいは du genre で問題無い。確かに一つのタイプを規定するという意味では定冠詞の使用それ自体は納得できるが、どうして genre や du genre ではないのか今のところ分明ではない。

## 5. style について

genre に比べるとその機能の広がりの幅は少し狭いものの、style にも同じような機能が認められる。先ず名詞句＋style＋（無冠詞）名詞句という形式の用法がある。genre の場合と同じくこの種の例ではよく知られた固有名詞やイメージを喚起しやすい事物を表わす名詞句が用いられる。peinture abstrait *style* Picasso「ピカソ流の抽象画」のような例は style 本来の意味が色濃く残っている。しかし des chapeaux *style* gangster Chicago「シカゴのギャングを思わせる帽子」のような例になると genre の場合となんら違いはない。また(25)のように名詞句＋du style＋（無冠詞）名詞句という形式もある。

(25) Il restait juste quelques desserts à servir, deux ou trois bricoles *du style* banane flambée et compagnie. (Philippe Djian, *37° 2 le matin*, 1985：91)

（あとはいくつかバナナフランベと付け合わせのようなデザートを少し準備して出せばいいだけだった。）

さらに genre 同様に説明の文を導入する用法もある。

(26) On avait mangé chez eux, un truc que j'ai pas aimé avec de la morue, comme ils

font les portos, et ça s'était mal passé avec Antonio. *Style* il voulait me taper la frime comme quoi puisque j'avais plus de père il allait s'occuper de moi.

(Thierry Jonquet, *La vie de ma mère !* 1994 : 40)

（彼ら（姉とパートナーのアントニオ）の所で食事をした。ポルトガル人がよく作る　タラを使った料理だったけど僕は好きじゃなかった。アントニオとはうまくいかなかっった。というのもアントニオは僕にはもうお父さんがいないので自分が僕の面倒を見てやるというように、僕に対して格好をつけようとしたからだ。）

そしてやはり genre 同様に（心内）発話的な文を導入する例もある。

(27) — T'es sapé comme un sonac ! il m'a fait, Djamel, mais il était pas méchant, il disait ça plutôt *style* il me plaignait.　(sonac : 労働者用の寮の住人)

(Thierry Jonquet, *La vie de ma mère !* 1994 : 63)

（「ソナックに住んでる労働者みたいなかっこうじゃないか」ってジャメルは僕に言ったけど、意地悪で言ったのではなく、かわいそうにっていう感じだった。）

(28) Dire que je l'ai pris pour un commercial de maison de campagne *du style* « Je crois que j'ai ce qu'il vous faut, un concept avec beaucoup de charme ».

(Frédérique Deghelt, *Les brume de l'apparence.* 2014 : 20)

（私は彼のことを「私はあなたに必要なもの、大変魅力的なコンセプトを持っております」とでも言ってきそうな、田舎の別荘を扱っている業者の人かと思ったなんて。）

(28)は du style＋文という形式であるが、いずれにしろ style の場合は genre と異なり、いかにもという発話や、誰かが実際に発したかのような発話を導入する(28)のような例は全体的に僅かである。(27)も心内発話的と言ったが、厳密には印象を述べていてむしろ説明と解釈する方が適切ではないかと思われる。以下の例でも引用符付きで「私はいいお母さんだ」という発話が導入されていて登場人物の心内発話のように見えるが、やはり典型的な発話の形を借りて一つのタイプを明示していると分析できる。

(29) Elle revenait le matin avec des croissants, pour faire *style* « je suis une bonne mère ».　(Grégoire Delacourt, *On ne voyait que le bonheur.* 2014 :262)

（彼女は朝クロワッサンを買ってもどってきて「私はいいお母さんよ」を演じていた。）

つまり style は genre 以上にカテゴリー化の場合も含めて説明を導入するという性格が強く、擬似的であれ引用マーカー的な側面は小さいようである。

ちなみに本稿では副詞あるいは談話小辞的用法は考察の対象にはしていないが、style には(29)や以下の(30)のように faire style という形式で副詞的に用いられてマナーを導入する例が散見される。genre にも数は少ないが faire genre という例は見つかる。例(31)は genre が文ではなく名詞句を導入している例であるが、faire genre の数少ない収集例である。

(30) —Vas-y, mais bouge-toi !... — Bouger pourquoi faire ? — T'es teubé ou quoi ? Fais *style tu voles* !　(Anaïs Carpita, Marie-Sophie Chambon, *100 kilos d'étoiles.*)

（「さあ、動いて」「動くって、何をするために」「あんた馬鹿なの、飛んでいるみたいに動いて」）（註：動画を撮ろうとしている、teubé = bête の逆さ言葉）

(31) （パーティーに行くために郊外列車に乗った）Ensuite Samia a sorti ses sudokus pour *faire genre* cageot du soir bonsoir sinon on se fait tout le temps emmerder.

(Anna Gavalda, *Fendre l'armure*. 2017：14)

（それからサミアは今夜外出している女性の中でも一番つまらない女性っていう感じを出すために数独を取り出した。そうでもしなければ四六時中（声をかけられて）うるさくされるからだ。）（註：bonsoir は soir と韻を踏んで言葉の調子よくするためにはさまれただけであり、ここでは特に意味はない）

## 6. まとめ

本稿では genre が文を導入している場合を分析して、特に形式と機能の対応を明らかにした。名詞の機能語への文法化という現象をとりあげた春木(2016)でも、各表現の形式的なバリエーションについても触れたが、領域限定詞的な機能を持つ côté, niveau, point de vue などの場合は形式上のバリエーションはあってもその表現の機能は基本的には変わらなかった。たとえば côté に関しては、起源的には du côté de という前置詞句が存在してそれがたとえば du côté de (la) nourriture → du côté nourriture → côté nourriture「食べ物に関しては」というように形式的に簡略化されていき文法化が進んでいくが、これらの形式は今なお併存して用いられており、言語位層の違いはあっても意味の上では違いは無いと言える [3]。question など若干の語については起源となる前置詞句が存在しないか特定はできず、近い機能を果たしている他の語の文法化によっていわば構文が成立して、その構文のメンバーとして機能語として用いられるようになったものもある。また、カテゴリー化という機能でまとめられる façon, genre, style などに関しては le rose genre Hello Kitty「ハローキティー風のピンク色」のような基本的なカテゴリー化を機能とする用法に関しては du genre / style＋名詞という形式や、à(de) la façon de＋名詞、à(de) la façon＋名詞なども見られるが、façon / genre / style＋（無冠詞）名詞という形が圧倒的に多い。いずれにしろこの場合も形式の違いに拘わらず、その意味機能に違いはない。

一方、本稿で検討してきた genre が文を導入する用法に関しては、genre と du genre の間に明らかにその機能に関して違いが見られた。du genre は前に名詞句がある場合もない場合も、やはり先行部分につながるという側面が強く残り、先行部分の内容のカテゴリー化という機能が前面に出ている。一方、genre は形式的に前置詞による先行部分への頸木がないことにより、その機能上の拡張においてより自由を得て、むしろ後続部分に副詞的、談話小辞的にかかっていく傾向が強いと言える。たとえば冒頭で引いた例(2)(3)の genre には先行部分と後続部分をつなぐという役割は認められない。これは、たとえば le rose genre Hello Kitty の中の genre Hello Kitty の部分だけが「ハローキティー風の／に」のように独立した要素として再解釈されて、genre が(32)のように名詞や副詞、動詞句などに単独でかかっていくことができる要素として拡張されていったと考えられる。

---

[3] 厳密に言えば、du côté de (la) nourriture の段階で後続名詞に定冠詞があるかないかで若干の意味の違いはあり、簡略化された形を十全な前置詞句に戻したときに定冠詞があるのかないのかということも考える必要があるかもしれないが、ここではひとまずその問題は考慮しないでおく。

(32) Si on part *genre* demain, on peut y être en deux jours, après...

(Anaïs Carpita, Marie-Sophie Chambon, *100 kilos d'étoiles.* 2019)

（たとえば明日出かけたら、次の日には到着できるし、その後は...）

このgenreなどはdisonsやpar exempleで置き換えてもニュアンスは変わらないと思われるが、これらの副詞的な用法については稿を改めて検討したい。

いずれにしろ、le rose genre Hello Kittyのような＜名詞＋genre＋名詞＞という構文から、genreの機能は三つの方向に拡張されていく。一つは先行部分の名詞の指示対象のカテゴリー化という機能から離れて、先行部分の説明や正当化を文の形で導入するという拡張である。もう一つは、先行部分との関係がさらに希薄になって、genreを含む発話全体、特にgenreに後続する部分に驚きや憤慨といった主観的判断というニュアンスを付加したり、ヘッジ的な働きをしたりするようになる。

もう一つは本稿で見たような文の形での先行部分のカテゴリー化であるが、こちらは機能をはっきりさせるという目的から先行部分とのつながりを明示的にするdu genreという形式で発達していく。カテゴリー化という機能においてはle rose genre Hello Kitty型の表現と連続性をもっているが、問題はle rose *du genre* Hello Kittyのようにdu genre＋名詞句という形式は存在はするものの、duのないタイプと比べると非常に希であるという点である。従って、形式的にはêtre du genreなど他のdu genreを含む表現に倣いながら、機能的にはle rose genre Hello Kitty型の表現の発展の影響を受けながらも、同時に先行部分の説明や正当化を文の形で導入するgenre単独の形式との差異化をはかるためにdu genreという形で新たに発展してきたものと考えられる。これは領域限定型のcôtéタイプの中で、question などがなんらかのもとの前置詞句の省略とは考えられないのに、他の類似の機能を持つ名詞と同様に機能語化してきたことを考えあわせれば、あり得る道筋である。文法化という現象は、時に一つの表現だけでなく構文として成立することでネットワーク的にまわりの表現をも巻き込んで起こるのである。

[引用文献]（関連文献については春木(2016)を参照されたい）

春木仁孝(2016)「話し言葉における名詞の機能語化について－côté, question, façon, genre, style, histoire de, etc.－」『フランス語学の最前線』第4巻, pp.85-125. ひつじ書房.

春木仁孝(2019)「histoire de + 不定詞構文について― une histoire de « histoire de » ―」『時空と認知の言語学』VIII：31-40.　言語文化共同研究プロジェクト2018,　大阪大学大学院言語文化研究科.

Fleischman, Suzanne and Marina Yaguello. (2004) Discourse markers across languages? C.L. Moder et A. Martinovic-Zic. (eds) *Discourse accross Languages and Cultures.*：129-147.　Amsterdam / Philadelphia, John Benjamins.

Yaguello, Marina. (1998) *Genre*, une particule d'un genre nouveau. *Petits faits de langue.*：18-24. Paris, Le Seuil.